

## 研究員卒業レポート

# 地域の中に 溶け込んで…

客員研究員

崎山 憲一 (今治市役所)

振り返って

「えひめ地域政策研究センター研究員の崎山です。」そう言っていた日が懐かしく思われる。移住・交流促進、結婚活動支援、商店街振興、地域づくり活動支援、各種講演会や刊行物の発行など、「地域づくりへの寄与」「地域課題の解決」を目的とした多岐の分野にわたる事業の中核



瀬戸内しまなみ海道の眺望

に関わらせていただく中で、様々な地に足を運び、時に寝る間も惜しんで多くの方とともに学び交流させていただいた。非常に有意義で充実した日々であったが、今となってはあれもこれもしておけばよかったということが出てくる。

多くの方に多大なるご協力をいただいたことに感謝するとともに、この時期の出会いを今後とも大事にしていきたいと強く思っている。

さて、えひめ地域政策研究センター（以下「ECPR」）への派遣期間が満了し幾分か月日は経過した。回顧録はこのくらいにして、ここからは近況を交えながらお伝えしたい。

### 地域をおこす

ECPR在籍期間中、外から見る視点、少し客観的でグローバルな角度から自分の住んでいる地域を見させていただいた。そのことは同時にふるさとに對



地域おこし協力隊員と宮窪水軍レースに参加

する思いを深く、そして強くさせた。この4月から私は地域振興課に配属され、主に地域の再生・活性化に関する様々な事業や仕組みづくりを行っている。

私の地域振興課への配属と同じくして、同課事業として今治市地域おこし協力隊12名が赴任した。地域おこし協力隊制度は以前に本誌でも特集されており、制度説明は割愛するが、彼らには当市の中では過疎化の流れが顕著な島しょ部を舞台に様々な地域活動支援を行ってもらっている。隊員はこの半年余り、それぞれ地域の現場に深く入り、地域の特性や課題を的確に把握し、主体的に地域貢献活動を実践している。「ダンス」「女子旅」「ICTによる情報発信」など、彼らの考え方は新鮮であり、真摯に取り組む姿勢は、私自身も触発されることが多い。おそらく地域住民も同様の感を持っているのだろう、多くの協力者と強固な地域づくりの地盤を築きつつある。

また、地域おこし協力隊員の起業・定住に向けた取り組み支援のため、ECPR在籍時より親交のあった斉藤俊幸氏が外部専



今治市継ぎ獅子・四継ぎ

門家である地域再生マネージャーとして当市に赴任したことも不思議な縁を感じており、再会できたことに感謝している。

この地域では、地域住民が「地域活性化推進協議会」を組織し、平成22年度より、住民自ら地域活性化推進事業を企画立案・実施しており、協力隊員と外部専門家が加わり、地域住民とによる三位一体の地域おこしが始まっている。

## 地域の中で

私自身、地域の自治会、消防団、伝統芸能である継ぎ獅子、PTA、公民館活動、生涯学習・スポーツの団体やイベントなど、様々な地域活動に関わる中で、地域には多くの気概を持つ優れた人材がいることに気付かされる。メディアに取り上げられることも少なく、決して派手ではない。しかし、持

続的に行う活動は地域に根付いた確かな力強さがある。「田舎の絵に書いたような田園風景はそこを管理し守っている人がいるから」「きれいな砂浜もそこを清掃している人がいるから」多くの人が癒されるその風景も、現代社会において美しさを維持しているのは理由がある。

E CPR在籍時にも、まちづくり活動に取り組む多くの方と出会った。自分の地域の現状を憂いつつも、地域住民のため、そして後に続く後継者たちのために一種の使命感として奮闘している。それは私自身の住む地域も例外ではないだろう。

## 仲間とともに

それでも地域づくりは楽しい。中でも仲間や知人との交流はその最たるものと言える。目の前で起こる出来事、人々の笑顔や驚き、そして同じ志を持つもの同士による「あうん」の呼吸で繋がる瞬間が好きだ。このことは私が地域づくりに関わる大きな原動力となっている。やはり地域づくりは人づくりなのだと考える。

「自治体職員は地域の旗振り役（リーダー）であれ」総務省地域人材ネット登録者である原康久氏の教えである。原氏は長年多くの地域づくり実践の場に関わる中で自治体職員の元気な所は地域も活気がある現状を教授いただいた。



今治市「しまなみアースランド」より

地域の一員として、地域づくりにどのように関わっていくか、私自身「地域に溶け込む元気な職員」でありたいと思う。

## これから…

「私はこのふるさとが大好きで、ずっとここに住んでいたい。でもこの地域では働く所がないから…。でも5年後10年後、もつと時間がかかるかもしれないけど絶対につか帰って、地域づくりに関わりたい。」昨年度、県内の研修会に参加した際に聞いた地域活動に取り組む高校三年生の決意表明ともとれる悲痛な叫びは、純粹に私の心を打った。

地域戦略として、どのようなブランドデザインを持ち地域をマネージメントしていくか、現在の現役世代である我々の責務である。子どもたちや子孫に誇れる地域づくりが出来ているのか。後に残る人々にどのような地域を残していくのか。日本全体が人口減少や少子高齢化へ進展する時代に突入し、地域の現状を見る限り、あまり多くの時間は残されていないのだから。信念と情熱を持ち、時に失敗をしても、小さな成功体験を積み重ねていくことで、前進していかなければならない。やはり、多くのことに影響を受けたE CPRの2年間はかけがえのないものであった。